
湖面月　～裏切りの黒、信頼の白～

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

湖面月　　裏切りの黒、信頼の白

【Nコード】

N2569E

【作者名】

雨月

【あらすじ】

まだ、幼かった頃、彼は双子に裏切られた。その後、引越して彼の心も一段落ついたのだが……甘かった。裏切りと信頼、そんなお話。

プロローグ（前書き）

えゝこの小説は……まだ、許可取ってないんで作者名を出していいのかわかりませんので伏せさせていただきますが、とある作者様から原案をいただいて雨月が書いたものです。えゝシリアスコメディーという矛盾したようなジャンルですが、これからどうかよろしく願います。

プロローグ

プロローグ

今日は僕の誕生日だ！今年から小学校一年生になって、とても小学校が楽しく感じられている。

これからこんな楽しい日々が過ぎていくんだろう……

子どもの俺は当時、お隣に住んでいた双子の女の子と一緒に帰っている……帰るな、そこにはお前が待っている楽しい日々は待っていない。

隣で笑っている女の子たちは僕のお誕生日をほめてくれている。この二人、これからもずっと僕と一緒に学校に言ってくれるといった。

人は裏切る……そんなことはおまえ自身がよくわかっているはずだ。人を信用するなどは言わないが、そいつらは絶対に許すな、信用するな。

「ただいまあ！」

僕は玄関の戸を開け、元気よくただいまと家にいるであろうお父さんとお母さんに挨拶をする。元気がないと男の子はいけないのだとお父さんは言っていた。

俺は目をそらすことにした。そう、この後に待っているのは楽しいことなんかじゃない。今の俺……かがりたつや 篝辰也かぎりたつやに出来ることはあの頃の俺、水守辰也が息を飲む声を聞くことしか術がなかった。

ここは、俺の夢の中の世界だ。どうしようもない、ただの空虚な

る場所なのだ。

俺の年齢が今、十七歳……あれから十年前が今の時間だ。次の日の新聞には『幸せの家族、崩壊！何が起こったのか！』という見出しで飾ったものだ。その記事の中身は簡単にいうなら次のように書いてあった。幸せな家族、その父親が母親を刃物で殺害。その後、自殺。残された少年は……

ま、こんなところだ。

俺はそのままその家から学校も通っていたのだが、噂というものは怖いもので、俺は『不幸な子』から気がつけば『不幸を呼ぶ少年』という異名を手に入れてしまっていたわけだ。俺の身の振られ方が親族の方々に決定されるまでいつもの通りの生活を送るしかなかった。

不幸を呼ぶ少年の日々は少年の心を壊すまでにそう時間を要しなかった。

まず、双子の少女はその少年を汚物でも見るかのような視線を送り始めた。もしかしたら両親よりも信じていたかもしれないというのに、この二人は見事にその少年の心を粉々に砕いてくれた。助けは求めた、それが受け入れることはなかった……裏切り、そんな言葉をそのときの俺は言葉よりも先に心で知ってしまったというわけだ。

それを知ってしまった俺は空虚な生活を送ることなく、憎しみだけで生きることとなった。

親族たちは遺産目当てで俺を引き取るといっていたのだが……親戚の中で最高権力を持つ少年の母方の両親が引き取ることとなったのだ。

ばーちゃんとじーちゃんは煮ても焼いても喰えないような人だった。

「……僕を引き取ったら不幸になるよ」

一人になりたかった、もう一度、お父さんとお母さんに会いたか

った俺はそういった。

「ほお、不幸？不幸というものはあんたの面のことを言うんじゃないのかい？ガキはガキらしく、遊んでおいで」

「友達がほしいんじゃない？ほら、この子もお前さんと遊びたがっておるのじゃよ」

ばーちゃんとじーちゃんはそういつて俺に友達を紹介してくれた。遠い親戚らしく、その子の名前は篝玉藻^{かがりたまも}という子だった。

そして、その子のおかげ、祖父母のおかげで……壊れていた心は戻った。あの日にも踏ん切りはついた、俺の世界は……あの頃に比べたらまだ、暗かったが一般人と変わらない程度まで明るくなった。今の俺と満員電車のサラリーマンとを比べたら俺のほうが幸せに違いない。

高校二年の俺はばーちゃんとじーちゃんが経営しているアパートの一室を借りた。高校になって心の友とよべる二人の友達が出来た。性格はくせがあって変な奴だが、いいやつらだ。

しかし、世界は笑えないように出来ているらしいと気がついたのは夏休みももう終わるとある日のことだった。

第一話：楽しみの後、苦しみの前（前書き）

更新するのが遅くなりました。言い訳を開始すると結構時間がたつてしまいますので………すいません、気にしないで下さい。さて、今回から本格的に始まる予定です。もつとも、この小説はシリアス的な要素が多く（勿論、コメディー要素も含んでいます）人間の黒い部分なんかもあるかもしれませんが。まあ、よろしければこれからもお付き合いをお願いしたいと思います。

第一話：楽しみの後、苦しみの前

一、
裏切られた心、崩れた心、沈んだ心、落ちた心……あなたはあり
ますか、そんなことが？

恨みますか、憎みますか、そのきっかけを作った相手を。

彼は忘れていきます、その二人を……

「……………あゝおわんね」

二メートル近くの身長に岩山のような体躯を持つ男がぱたりと倒れる。それだけで俺の部屋はゆれたかのように思われた。この男、名前を工藤大策くどうだいさくという。茶髪で不良な男でもあるのだ。

「揺らすな、こちらの実験に支障をきたす」

その隣では白衣の男が眼鏡の端を抑えて、そんなことを言う。その手に持っているフラスコから不思議な煙が出ている。白衣の男、名前を渡辺徹わたなべとおるという。秀才だが頭のねじが一個足りない俺は思っている。

「お前ら、勝手に人の家に上がりこんで好き勝手するんじゃないやねえよ！」

そろそろ昼ごはんだ……………そんな時間にこの二人組みはやってきたのだ。迷惑だ、マジで。

げんなりとした顔で二人組みを見ていると工藤大策はとても心外そうな顔をした。

「おいおい、兄弟……………俺は転がり込んだんだぜ？」

その隣で普段は工藤大策と仲が悪い渡辺徹がうむと頷く。

「私は開脚前転で侵入したかな」

「今、侵入したって言ったろ？認めたな、徹？」

「こほん、言葉の綾だ、気にするな」

そういつて再び実験を始める。煙が先ほどより増えてきているし、

異臭までしてるぞ、この三流研究者！

ねじの外れた天才だか馬鹿なんだかよくわからん奴は放っておいてもう一人の馬鹿を見る。

「大策、さっさと宿題を終わらせろ」

「無茶言うなよ……………俺にとってはこの問題を解くことに対して快感を感じたいのだ」

たまらんという面をしながらそのごつつい手で鉛筆を握っている。こいつは変態か？この一体を脅かしている『轟傑の拳』とは思えん発言だ。鉛筆が悲鳴を上げているし……………大丈夫なんだろうな、その鉛筆は俺の鉛筆だぞ。

「解くつてよお……………となりにある宿題は完璧に徹のものだろうがよ？」

「気にするな、これは等価交換という奴だ。どっかの兄弟もそれがすべてだつていった気がする」

「いや、俺の部屋ですることはないんじゃないのか？」

しょうがないなあと言つてどっかのロボットが駄目な住人に道具を提供するときの声を奴はしゃべった。

「いもゝとのしゃんゝ！！！」

ごつい兄貴に対して、妹は可憐だ……………その手にはバスタオルを巻いている工藤大策の妹、民子ちゃんの写真が握られている。

「……………等価交換だ。民子を拝んで俺たちの昼食まで作ってくれ」
う、うゝむ……………これは非常にいい交換条件だな……………

「悩むな……………」

「珍しいな、お前がそこまで悩む姿を見たのはエロ本を買おうとして年齢偽装がばれそうになったとき以来だな」

「うるせえよ……………」

それまで黙っていた渡辺徹が口を開く。

「今日はこの部屋の隣に引っ越してくる人がいるのだ。辰也の祖母は辰也と同世代の引っ越してくる二人にこの町を案内するように頼んでいるのだよ。つまり、我々二人がいたら邪魔になると思うの

さ。馬にけられてしまつかもしれないからね」

口を開くと毎回毎回ろくでもないことばかり言うな、こいつは

.....

「けど、そいつらが男かもしれないだろ？」

工藤大策がもつともなことを言う。そうだな、俺も知らされていないからよくわからんな.....

「いいや、この前隣の部屋を下見に来ていた二人の女の子がいたからな.....間違いないだろう.....大策、宿題は僕の部屋で見るといい」

渡辺徹は珍しく、立ち上がった。いつもは頑として立ち上がったリ、何かをしないような奴なのだが.....どうしたんだろうか？

「おい、変なものでも食ったのか？」

「おいおい、心から君の事を考えてあげている親友にそんなことをいうのかい？」

心外だとばかりに肩をすくめる。

「いや、俺もそう思うぞ？どっちかという足引張るのが好きだろ、お前？」

大策もそんなことを言つて俺を加勢してくれる。

「足を引つ張るか.....足を引つ張ってくれているのは毎回、君だろ？」

三人で法に触れそうなことをするとき、確かに失敗する確率が高いのは工藤大策に他ならない。

「まあ、明日雨でも降るかもしれないが.....ありがとうな、徹」

「じゃあな、徹」

「.....ほら、君も帰るんだよ」

居座ろうとした工藤大策を引つ張つていき、この部屋に静寂が訪れた。あの二人がいなくてここまで静かになるんだな、この部屋は。

早めの朝食をとり、お隣さんが来るのを待つ。

ぴんぽん！！

どっかが壊れているような音がして、チャイムが鳴った。

「はい」

立ち上がって玄関に手をかけて……開けた。

そこにいたのは双子だった。

ああ、お隣さんは双子さんなのか。俺はただ、それだけおもった。
綺麗な二人だ……どっちが姉でどっちが妹なのかはわからないが。

「……」

右の女の子が何かいった。

第二話：苦しみの前、悲しみの後（前書き）

え、これからちょっとシリアスがはいってきますが……正直言って執筆している作者も先が読めてません。これからどういった展開になるのか……期待しててください。感想なんかを期待していただきますので、読み続けてくれる人がいたらお願いします。

第二話：苦しみの前、悲しみの後

二、

塞いだ心、忘れた記憶…………

時がたち、忘れ行く旧友の顔、あなたは思い出せますか？

たとえ、それがにくい相手だったとしても、裏切った相手だったとしても…………

そして、あなたはその相手を赦せますか？

「久しぶり！」

右の女の子はそんなことを言った。どこかよそよしいのはなぜだろうか？

「え？」

面識のない俺はきよんとするしかなかった。

「ほら、辰也が住んでいた隣の家に住んでいた双子の二人、忘れちゃった？」

おぞましい記憶、一部、塞いだ記憶があつた頃に俺を引っ張ろうとしている…………いや、両親が死んだことはもう問題はない。踏ん切りはついた。だが、裏切った相手のことは…………

「…………帰ってくれ」

俺はそういつて玄関の扉を閉めた。

今、思い出した。あの二人だ、俺を裏切った双子だ。どっちが姉で、どっちが妹か…………そんなことはどうでも良くなった。

綺麗な花だが、人を傷つける……………そんな花に俺は興味はない。玄関の前にはまだ、いるのだろう。心配がする。

何か言っても帰るかわからない。無性に心が汚く染まっていくのがわかった…………あいつらに復讐したい。そんな気持ちが出てきたが…………

「……………」

ふと、一人の女の子の顔が浮かび、その気持ちはつぶれた。そうだ、あの子に連絡しよう。

携帯を取り出してさっさと電話する。

何度かのコール音……………すぐに出るはずなのだが、出なかった。

「……………ああ、そういえば海外に行ってるって言ってたな……………」

昨日そんなことを直接俺の部屋まで来て話したのだった。いかん、頭がぱにくってるから忘れていたのかも知れんな。

玄関の外にはあいつらが、まだいる。いつまでいる気だ。俺はお前らを町に案内する気はない。

子どものころに受けた心の傷は、そうたやすく治らない。

ベランダに出る。あいつら二人とは反対側の部屋に行くために壁を伝ってわたろうとしたのだが……………

一陣の風が吹き、俺はアパートから落ちた。

「ぐはっ!!」

「ひいっ!!!!」

右太ももから落ち、少しの間悶絶する。近くにいたおっさんが俺を見てビビッて腰をぬかしていた。しごく、全うな反応だ……………それより、俺の部屋が二階でよかったな……………今頃ぺちゃんこになっていたかもしれんからな。

驚いているおじさんを置いて、俺はこのアパートにつけられているエレベーターへとむかった。

みていたおっさんがこれは何かの撮影か?といったのが聞こえた気がした。

とりあえず、アパートから脱出できた俺はじーちゃんとかばーちゃんに事情を聞くために屋上へと向かう。

エレベーターであがっていく途中、まだ俺の部屋の前にあの二人がいるのが見えた。憎悪が、心を包む。心は昏く、凶暴性を俺に持たせようとして……………

『最上階です』

機械の無機質な声で我に返った。

考えたって、時間の無駄だ。俺はさっさとじーちゃんとかばーちゃんの部屋をノックもせずに関ける。

「じーちゃん！ばーちゃん！！」

「どうしたんだい、そんなに慌てて？」

この二人があの子の知らないことはないはずだ。きっと、承知のこととここに呼んだに違いない。

「何で、何であの二人を……」

言葉が続かない。あの日のことを思い出しそうになり、心が締め付けられて涙が出てくる。

流れる涙は部屋のじゅうたんをぬらした。

ばーちゃんは普通の顔で言った。

「……あの二人、お前がお隣だと聞いてよろこんでいたよ」

何を言っているのかわからなかった。心が何かを求める。そう、

それはあの二人に復讐だ。それだけを求めている。それが、わかる。

「あの二人、お前に謝りたいといっていたよ」

心が、止まった。

「謝る？何を？」

あの二人が何を謝りたいのか、それはわかつている。

だが、憎しみはまだ、心を覆っている。

いや、覆っているんじゃない、俺の心は今、憎しみで出来ている。

あの二人がにくいのだ、俺は。いや、憎いというのならあのときの友達すべてがにくいはずなのだが……憎いのはあの二人だけだ。裏切られたという気持ちがあるからだろうか？何故かは知らんがあの二人に期待をしていたからなのか？あの二人が俺を救ってくれると信じていたからなのか？駄目だ、よくわからない。

「そうだぞ、辰也」

唐突に後ろで声がした。

「……………じーちゃん」

しゃがれている声のじーちゃんは双子を連れてきていた。どうやら、見事にはさまれてしまっているようだ、俺は。

憎しみのこもった視線があの子を貫くのを俺は感じた。その視線の持ち主は俺だ。双子は俺の視線を受け止めずに、そらした。

そらしたまま、さつき久しぶりだといった女の子は俺に言った。

「ご、ごめんね」

「……………あ、あの」

すごく、耳障りだ。あの子の片割れだと知らずに聞いたときは心地よい声だったのに、人の心は現金なものだな。

「ご、ごめんなさい」

もう一人もそんなことを言う。

耳は受け付ける、心は受け付けない。赦さない、赦されてはいけない存在なのだ、この二人は。

あの時、俺は苦しくて彼女に手を伸ばした、近寄らないで……………

彼女はそう言っただけから逃げた。悲しさで押しつぶされそうに手を伸ばした、おびえた顔で……………彼女は彼女が嫌いだった毛虫を見るような目で俺から離れた。

俺はじーちゃん、双子を押しつけてじーちゃんとはーちゃんの部屋を出た。

「あ、あのさ、辰也……………」

「だまれっ！俺は知らない……………僕は、僕は裏切ったお前たちを赦さないからな！！」

あの頃の俺はまだ心のどこかで生きているらしい。

正直言っただけ、今の俺はあの子を赦している。だって、あの時あの子の立場だったら俺だってそうするから。友達がすべてだった。自分が不幸をよぶ少年と一緒にいたら確実に仲間はずれにされてしまっ……………そう思うのは当然だ。

赦していないのはあの頃の俺。

俺は俺、だが、あの頃の俺は心の奥に住んでいる。俺は……あ
の頃から成長しきれていないのか？

第三話：悲しみの後、始まりの前（前書き）

どうも、雨月です。えゝ………毎週土曜日に更新しようかなって
思ってます。これからちょっとだけ暗めかもしれません。

第三話：悲しみの後、始まりの前

三、

出会いたくなかった、心が痛むから。会いに行きたくはなかった、心が責めるから。

それぞれに笑顔があった。出会えば消えた。

あなたはどうですか？そんな相手に会うとやはり、消えますか、笑顔が。

雨が降り出したらしい……………どうせ、夕立だ。

あれから、一日がたった。

しつこく、あの二人は俺の家の前にいるようだ。昨日の様に飛び降りてもいいかもしれないが……………さすがに恐怖が俺の心を覆う。正直、高所恐怖症の人の気持ちが生まれてはじめてわかった気がした。

今、俺の心は少しの変化を見せていた。いや、高所恐怖症になっただけではない。

裏切った、あいつらは赦さない……………夜道で襲え、そして俺は警察へつかまって未来を潰してしまえ……………そういった汚い感情は何故、あの二人は裏切ったのか……………なんで、裏切ったの？僕は……………裏切って欲しくなかった、信用していたのに……………という心が変わってきた。自分で何を考えているのかさっぱりわからない。われながら、ガキだ。自分で考えていることもわからないなんてな。

あの二人は隣人として、俺に接しているだけなのだ。そう、それだけなのだ。過去のことは関係ない、気にしない、割り切るのだと……………言い聞かせた。

心を割り切って、俺は深呼吸する。俺はガキじゃない。

玄関へと向かい……………扉を開けた。

「辰也！」

「辰也君！」

二人はともうれしそうな顔をした。この二人に俺はこれから、割り切ると言うとても悲しい言葉を言わなくてはいけない。心が痛い、だが、こうしなくてはこの二人を恨まずには……いられない。「はじめまして、お二人さん。俺の名前は篝辰也。よろしく！」

「た、辰也？」

「……………」
落胆、恐怖、絶望……………そんな風に目の前の二人の顔は変わっていった。心が締め付けられる。

「ど、どうしてそんなこというのよ、辰也！」

憤怒の表情で食って掛かるように俺に問いかける双子の子……………ああ、そういえばこの子はすぐ……………いや、俺は知らない。この子のことなんて知らないのだ。だって、今日はじめてあつたんだから。「ごめん、初対面の人に名前を呼び捨てにされたくないんだけど……………苗字ならいいんだけど」

「っ……………」

心が折れそうになる。もうちょっとで、この子は確実に泣く。この子を泣かせたい、お前の所為でこんな風になったのだと思い知らせたい。

しかし、こらえた。このこはあの頃に比べて……………強くなったのか？困惑が俺を包む。

「み、水森……………」

がつんっ……………！！

「俺は篝だ……………水森じゃない……………」

玄関の扉を右の拳で思い切り殴った。その音にびくりとする双子。「あ、ごめんごめん……………」

右の拳がめちゃくちゃいたい。涙が出そうだ、いや、マジで。

「た、辰也君……どうしちゃったの？無理してるみたいだけど？」

その目、その顔……俺を怖がっているその顔だけで俺の心を誰かが支配していく……それを抑えることが今の俺に出来るのか？いや、気づけ、辰也……怖がっている顔なんかじゃない、この子は心配しているのだ、俺を。

「いや、急に玄關を殴りたくなつたから……ごめん、気にしないでくれ……さ、町を案内してあげるからついてきて」

俺はそういつてさっさと歩き出した……右手を振りながら。

二人のことを完璧に無視して……俺は空気に町を案内するかのようにして雨の降る中かさもせず歩いていた。

一通り町を案内して俺は町の中央にある公園のベンチに腰掛けた。既にベンチは濡れていたが関係なかった。

町を案内している間、二人はひっきりなしに俺に話しかけてきた。昔から話しかけてきた活発な姉、あんまり俺に話しかけてくることはなかったが、姉よりも長い間となりについてくれた妹……名前は完璧に忘れてしまっている俺が悲しくなった。

話しかけられても俺は自分の心を抑えることではいっぱいだった。

「この町、どうだった？よくわからないところがあつたら教えるけど？」

「……辰也、こっちにおいでよ」

青ざめた顔でそういう双子姉。

「風邪、引いちゃうよ？」

泣きそうな顔でそういう双子妹。

「……一つ、昔話をしてあげる。面白くなかつたら聞かなくていいけどね」

惨めだ。俺はそう思った。

「ある日さ、一人の男の子が家に帰ったんだ。そこには首をつっている父と家宝だといっていた日本刀に貫かれている母を見た。愕然

とした男の子なんだけど……手紙を見つけて読んだ。漢字が多くてわからなかったんだけどね……今では中身も忘れちゃってるよ、きつと」

双子姉はぎよつとして俺を見ており、双子妹は息をのんだ。

「それから、彼がどうなるか……そうだね、誰が彼を引き取るか。そういったことはまだ決まっていけない間は小学校へ行くことになったんだよ。遺産の話をあまり聞かれないようにと厄介払いにね。ろくな親戚じゃないよね、まったく。小学校、いったっていいことはなかった。その男の子、仲良くしていた双子がいたんだけどね……」

双子と聞いて目の前の二人の顔は青ざめた。いや、もともと青ざめていたから勘違いだろう、俺の。

「……………その男の子の心、壊しちゃったんだよ。まるで、汚物でもみるかのように男の子を見てね……………信用してたのに、心を二人に預けていたといっただけいい存在だったのにね。男の子を選ぶことなく、他の友達をとったんだって男の子は思った。ああ、壊れた心はあとでちゃんと戻ったよ？他の人が治してくれた……………ある程度成長したその男の子の前に双子が何をしにきたかはわからないけどきたんだよ。せっかく治った心を再び壊しにきたのかって男の子は思ってる。憎い、そう、殺したいと思ってるのかもしれないね。けど、成長している男の子は双子を赦している。おかしい話だよ……………それでさ、くだらない話だけど、それほどまでに男の子は双子のことを信じていたんだよ……………どう？ちよつと悲しいお話だったけど？」

感想も聞かずに俺は立ち上がって家へと帰ることにした。いかん、そろそろ風邪を引きそうだ。

歩き出してすぐに……………

誰かに背中から抱きしめられたのを感じた。

「ご、ごめん……………ごめん……」

姉のほうだ……………憎しみが心を支配する……………彼女をどうこうし

ないうちに早く引き剥がさなければ……

憎しみの声でどけ！と俺は言うことにしたのだが……

「ど、けよ……」

悲痛な声しか出てこない。その声を自分自身が聞くことによって心は痛み、悲鳴を上げる。

「ごめんね、辰也君」

妹のほうも俺を抱きしめる……心が人の形をしているのなら今、頭を抱えて目から血の涙を出しているに違いない。

涙が頬を伝おうとしている……いや、涙じゃないな、これは雨だ。雨粒が俺の頬を流れていつているだけだ。あの日、涙は見せない、流さないって決めているからな……まあ、嘘だが。

「……はなれてくれ……人が見てる」

俺は二人を引き剥がした。

「……じゃあな」

そして、走り始めた。勿論、あの二人が追いつけないほどの速さで俺は家に帰ってタオルで頭を拭き、さっさと風呂に入って布団をひつかぶって寝た。そのおかげか、風邪を引くことはなかった。

第四話 始まりの前、事件の後（前書き）

どうも、雨月です。最近は暑かったり寒かったりがこちらでは続いており……季節の変わり目を体感しています。さて、これからどういった展開になるのか……期待していて待っていてください。

第四話 始まりの前、事件の後

四、

悩み、もがき、答えを探す。

求めたものが何なのか、得たものが何なのか……

それが必要だったのか、そうではないのか……

あなたは、知っていますか？

夏休みも終わりを告げ、始業式の長い長い校長の話も聞き終えて
LHRにて転校生の双子……吉崎理恵（姉）と里香（妹）の紹
介があつていた。

「おーあれがお隣さんか？」

工藤大策がそんなことを言っている。けっ、不良のくせして皆勤
とはお前、不良じゃないだろ？ さつさと不良をやめろ。

「ああ、そうだ。僕が見た二人はあの二人だからな」

渡辺徹、お前が何故答える？ 目の下にくまが出来ているのは地下
で売れないように売りさばくといっていた薬の影響か？ 秀才のくせ
して社長出勤とはお前のほうが不良だな。

「ほお、うらやましいな」民子、怒るぞ、きつと」

「ふむ、そうもいくまいよ……あの二人、辰也の過去に関係して
いる二人だそうだからな」

この二人には過去の話について既に話してある。話したとき、こ
の二人は鼻で笑いやがった。まあ、うじうじしていた俺が悪いのも
あつたのだが……今ではいい思い出だ。

「なるほど、それなら放っておくのが一番だろうな。力が必要とき
は言ってくれ」

「ああ、そうだ。僕らに面倒が回ってこないようにしておかないと
いけないようだな。事前に案を考えていたほうがよさそうだ」

この二人は自分が世界の中心だと考えているから本当にうらやま

しいよな〜……………まあ、なんだかんだでこの二人、俺のことを心配してくれているようだし。

放課後となり、双子の周りには人だかりが出来た。まあ、綺麗だったからな。

今、憎しみの心は消えている。ただ、あの二人を見ていると悲しい。

「おいおい、何をそんなに思いつめている顔をしているんだ、兄弟？」

「てめえの兄弟だったら俺はもうちよつとごつい」

工藤大策が俺の肩を掴む。軽く掴んだだけで物凄く痛いんだが？
きつと、りんごを掴んだだけでビクバンみてえなことがおきるんだろうな。

「で、なんか用かよ？」

「うむ、良くぞ聞いてくれた……………これだ」

手渡してきた一枚の紙を手にとった。

「……………君も女子高に侵入しよう？……………お前、不良だろ？『轟傑の拳』って異名が泣くぜ？不良はこんなことしないだろ？」

するのは変態だ。

「まあ、一応不良だがな……………これにも色々と事情があるんだよ。

ああ、この紙は気にしないでくれ。これとはぜんぜん関係ない事情だから」

「事情？」

困ったものだといって工藤大策は話し始めた。

奴の話を要約するところだ……………渡辺徹にとある金庫を盗られ、女子高の更衣室に持っていかれたとの話だ……………知り合いの名前が混じっていたのは気のせいかな？

「徹はどうした？言って返してもらえよ」

「いや、奴は先ほど職員室に連行されていった。きつと、あの薬のことがばれたのかもしれないからな」

なるほど、珍しく奴が失敗したというわけか……………

「それで、お前に頼みたいのだ。さすがに一人で行くのは気が引けるし……………」

はは〜ん、巻き込む気だな、俺を。さっきは面倒ごとには巻き込まれなくなさそうにしてたくせしてよ……………

「……………あの双子と話したいという心を抑えて俺についてきてはくれんだろうか？」

「誰も話したいとおもってねえよ……………」

整理がついていない、話したって……………傷つけるだけだろう。

「わかった、ついてく」

「おお！さすが我が兄弟！」

「だから！俺はお前の兄弟じゃないって！」

「民子と結婚すれば兄弟だ！」

「……………」

豪語するお前が俺は怖いよ……………ほら、クラス中の連中が俺たちを見てるぞ？冷めた目でな。

女子高に女装して侵入するというよくあるんだかわからないことをせずに俺たちは素直に警備員さんに事情を説明した。

「う〜ん……………ちよつと待っててね、君たち」

人のよさそうな警備員さんはそういつてトランシーバーでなにやら連絡をしていた。数分後、おとなしく待っていた俺たち（工藤大策は見た目が不良なため、警備員さんと話すときはかなりおどおどして話すようにと俺が釘をさしておいた）の元へ女性の警備員さんが現れた。いや、よくよく見たら……………警察だ。

「さ、ついてきて」

てつきり連行されるのかと思ったのだが、校内にあっさりと入ることが出来た。どうやら、この人が俺たちを連れて行ってくれる人のように。まあ、近々この女子高も共学制になるらしいから……………今ではどうでもいいことなのかも知れんな。

そして、あることを俺は思い出した。

「……………大策、ここって今思えば民子ちゃんに通っている高校じゃないか？」

「ん？ま、まあそうなんだが……………」

民子ちゃんが通っているのなら別に俺たちが赴かなくても民子ちゃんにとつて来てもらえば良かったんじゃないのだろうか？

そのことを大策に伝えると奴は首を振った。

「……………それがさ、とられたのが民子には見せられないような奴で……………」

前を歩いている人に注意をしてそんなことを言う。

「なるほどな……………なら、放っておけばいいだろ？」

「俺の名前と住所を徹が書きやがった」

「そいつは放っておこうにも無理があるな……………」

何を忘れたのかは教えてくれなかったが、奴の首が飛ぶぐらいの威力があるのだろう……………顔が青ざめている。どんな相手でも顔色変えない工藤大策だが、珍しいこともあるものだ。

「あー！」

まだ女子生徒が残っていたのか、よくわからないがちらりと姿を見せ……………それを見た工藤大策が叫ぶ。

「どうした？」

「今の子が持つていった！俺、先に行くぜ！」

「お、おい！大策！？」

俺と警官を残して奴は走っていった。あの巨体であの速さを出す秘訣はなんだろうな？まさか、心臓とかが二個あるとか？それなら肺も四つあるに違いない。

「えーと、今の子は何でいきなり走り出したのかな？」

警官は俺にそんなことを言ってきた。

「なんだか彼が探していたものを持つていていた女の子がいたそうで……………あわてて取り返しにきました」

校庭側に行っていたからな……………

「うん、あつちが確か……プールがあるところなんだけど」
さて、質問だ。よくわからん男が女子しかいないであろうプール
に行ったらどうなる？

「お前はいい友達だった、大策。じゃ、おまわりさん……俺、こ
の後彼女と甘いひと時がありますので……」

「ほら！君の友達でしょう！逃げない！」

腕をつかまれ、俺もプールへいくこととなった。やれやれ、これ
はしょうがないことなのだ。別にみたいってわけじゃないんだぜ？

第五話：事件の後、変革の前（前書き）

毎週土曜更新と言っておきながら……先週更新してないですね。
すみません、色々ご迷惑をかけてしまって……この小説について、ふと、終わり方を考えたのですが……ううむ、今のところは相打ち（！？）しか思いつきません。

第五話：事件の後、変革の前

五、

関係のない出来事、そう思っていないませんか？

あの日の出来事、今につづいているのかもしれない。

あの日の裏切り、今の信頼……………

今のあなたはとうですか？続きますか？それとも……………

プールでは既に大騒ぎとなっていた。

「か、返してくれ！」

育ちのよさそうな女子を相手に工藤大策が襲い掛からんばかりだ。だが、俺は何もせずにそれを見ていた。

「何してるの！止めないと！」

「えーいや……………別にいいとおもいます。だって、あいつの妹ですから」

そう、育ちのよさそうなお嬢様の名前を工藤民子という。似てないと評判の兄妹で、彼がくれたのもこの妹の所為だといっている。俺が保障していいだろう。

「やめてよ！お兄ちゃん！これは私が拾ったもののなの！」

「やめろ！これがお前に渡ったら俺は辰也に殺される！」

ん？なんだか俺に関係しているような言葉だったが……………

もみ合っていた結果、握っていた箱は飛んでいき……………高い塀を越えて外に出て行ってしまった。

「あゝ……もう！お兄ちゃんのせいだよ……！」

民子ちゃんはずばやくいなくなり、膝をついている工藤大策だけとなった。

「なあ、あの箱の中身ってなんだったんだ？」

「……………知りたいのか？まあいいや……………あれはお前の恥部だ」「恥部!？」

なんだかとても危なげな響きだ。

「……………民子に何か頼みごとをするときは何かを与えなくては動かないのだ……………だから、渡辺徹からお前のはずかしい写真を買って民子のえさにしよう……………」

最悪だな、こいつは……………」

「それと、まだ続きがあるんだが……………一週間以内にさっきの箱を回収しないと今度は俺の恥部を町中に張り出すと渡辺徹が言ってきた。冗談だとは思ったが……………」

奴が冗談を言うはずがない。奴は常にまじめだ。

「……………冗談だとは思えなかったから素直にここまでやってきたのだ」

その考えは正しいぞ、工藤大策。あいつ一人に対して俺たち二人の脳みそをもつてしても勝てないだろうからな。ん？こんなところで油を売ってるほど俺には時間があつたのだろうか？

「そんなことより、さっさと追いかけるぞ！」

「そ、そうだったな……………」

消えていった民子ちゃんたちを追って俺らは警察の人に頭を下げて二度と来ることがないであろう高学歴の学び舎を後にしたのだが……………」

「あ、お兄ちゃんたち……………」

そこにいたのはあたりをきょろきょろと見渡している民子ちゃんの姿だった。

「どうしたんだ？箱は？」

通行人にでも拾われて中身を確認されたら確実にお外を歩けなくなってしまうような写真が入っているのだろう……………俺は恐怖を覚えていたのですばやく民子ちゃんに尋ねた。だが、彼女は首を振ってこついった。

「……………それが、私が外に出てきた時点でもうなくて……………」

「！？」

時既に遅し！俺の恥部がローカル新聞に載るかもしれない！？助

けて、じーちゃんばーちゃん！

「と、とりあえず手分けして似たような箱を持っている人を……探すぞ！」

「「おー！！！」」

即席で結成された『俺の秘密の箱を探せ！チーム』は三つに分かれて箱を探すために翻弄することとなったのだった。

「やあ、奇遇だな、辰也」

電柱に背中を預けてたっているのは白衣をまとった徹だった。顔が非常に愉快そうだ。こちらとしてはそんな面を見るためにうろつろしているわけではない。

「徹！お前、あの学校……」

俺は後ろにそびえるでかい女子高を指差していった。

「……から何か飛んできた箱を見なかったか？」

「ん？ああ、あれか……そういえば転校生の二人組みが拾って中身を確認して……」

「！？」

絶望がこの空を覆った気がした。いや、まあ、今では他人……隣人だから他人でもないか……とりあえず、ちよつと自体は悪いほうに転がっていつているようだ。いや、既に転がり終えてしまったといったところか？

黙りこんだ俺に対して徹は一つ小さなため息を出してこういった。

「何、そんなにあわてなくても箱はここにあるよ」

「……脅かすなよ」

気がつけば徹の手には争奪戦を繰り広げていた目的である箱が握られていた。

「まったく、嘘までついて何が楽しいんだか……」

双子を出すところがおそろ悪いな。

「ああ、双子に渡ったのは嘘じゃないよ。彼女ら、中身も確認しちゃったし……」

「……………」
啞然とした調子で徹を見ると奴は首をすくめて弁明を始めるようだった。

「僕が職員室から出てきて君たち二人の後を追いかけていたらちょうど箱が出てきてね……………敷地外にいた双子のところに箱がやってきたのさ。彼女たちが中身を確認するのを見届けて、僕は双子に箱を返してもらったというわけさ」

「って、おい！一部始終を見てたんなら速めに返してもらえよ！」
そうつつこむと意外な言葉が返ってきた。

「おいおい、つつこむところはそこじゃないだろう？」
「？」

「何故、ここに双子がいたのか……………不思議じゃないのかい？」
言われて見れば確かにそうだ……………この学校に友人がいるのだろうか？

俺の考えを見透かしてのか、徹はこういった。
「確かに、そうだろうね……………だけど、何も女子だけが友達って限らないだろう？」

「おいおい、ここは女子高だぜ？女子高に男子がいるわけねえだろう？」

俺を指差して徹は言った。

「いるだろう。ここに？考えればすぐに思いつくさ。彼女たちは君に用事があったてここまできた……………もしくは、君が何故、女子高なんかにはいつて行ったのか知り合いとしては……………結構理由を知りたいと思うけどね？」

「……………」
まあ、確かに知り合いがこういった場所に入っていったら俺も知リたがるといえば知リたがるが……………

「……………あいつら、もう帰ったのか？」

「ああ、君の写真とその箱を交換してあげたら帰っていったよ」
「よ」

俺が何か言いかけようとしたその瞬間に……………

「た、大変！辰也さん！！」

走ってきたのは民子ちゃんだった。日ごろから騒がしい……………失礼、元気のいい彼女がさらに騒がしい……………失礼、元気がとてもよるしい。どうしたのだろうか？

「どうしたんだ？またあの馬鹿（大策）が何かやらかしたか？」
冗談でそう言ってみると彼女は頷いた。

「う、うん！お兄ちゃんが私たちの学校の女番長とにらみ合いになっちゃって……………」

返答に困っている俺に徹は、言った。

「……………見捨てよう」

「あっさりだなーおい……………ほら、友人代表としていくしかないだろ？暴力沙汰とかになったら色々やばいぞ？」

珍しく嫌がつている徹を引きずりながら民子ちゃんとともに俺たちは大策のもとへと向かったのだった。

写真のち程どうにかして返してもらわないと……………

第六話：変革の前、その後（前書き）

えゝ今週もうまく更新できたのでよかったです。双子編はだいたい十話ほどで終了する予定です。結末も既に決めています……読むか読まないかはあなた次第です。双子編の結末を見なくても一応、続けて読んでも問題はありません！感想なんかお待ちしていますのでよろしくお願いします！

第六話：変革の前、その後

六、

写真はそのまま

しかし、現実はそうもいかない

変わり行く日々、変わる友人

変えたのは時間、もしくは………

女子高の近くにある空き地にて、犬猿の中と称されている俺らの高校の番長と民子ちゃんたちが通っている女子高の女番長さんが見合いをしていた。ああ、犬猿の仲と称されている………とというのは以前の番長同士で、今は代替わりをしており時代の流れを感じずにはられないな。

緊張した空気がその場を包み込んでおり、一触即発の空気にその場にいる誰もが空気を感じ取ることさえも難しく感じている。

「辰也、君が僕をここまで連れてきたのは構わないが……君がどうにかしてくれ。僕は近づけない」

女番長は徹の従姉……弱点が存在しないと思われていた徹に対しての最終兵器である。徹が彼女の半径五メートルに入りこめば徹はポコポコにされてしまうらしい。

「……ああ、わかった」

端正な顔立ちにトラでも睨み殺してしまいそうな眼力……すらりとしているが、強靭な一撃を相手にお見舞いするという徹の従姉、名前を渡辺律わたなへりつという。右頬に傷が入っており、年季の入ったぼろぼろの制服を着ている。

「民子ちゃん、君は今すぐここから離れてくれ……危険だから」

俺はここまで道案内してくれた民子ちゃんにそう告げる。

「わかった」

「じゃ、辰也よろしく」

徹もついでに離れていつてしまった。うつむ、律さんたちは五人ほどこいるんだがこっちは俺と大策だけかよ……………

平和主義である俺はこそそと大策の背中まで言つて耳打ちをする。どうやら相手にはまだ気がつかれていないようだ。すごいぞ、俺。

「大策、お前、何してるんだよ」

「……………睨まれたからな」

「おいおい、睨まれただけでこんだけの空気を出すのかよ……………」

「ほら、いくぞ。これ以上時間を費やすな、お前が何故、睨まれたのか思い出せよ」

「何ってそれは……………ああ、そういえば箱を探している最中だったな」

「ようやく思い出したのか、大策は相手に対して背中を見せた。」

「おつと、逃げるのかい？」

「ああ、ちよつと用事があつてな……………友人の一大事なんだ」

「お前が引き起こした一大事でもあるんだがな。」

「友人？……………お、辰也じゃないか」

友人という言葉に反応して律さんはこちらを見る。既にあの人は俺を標的としたに違いない。

「あ、あはは……………どうも」

俺はもてるほどの愛想笑いというスキルを持って彼女に笑いかける。

「久しぶりじゃないか、どうだ、これからお茶しないか？」

ニコニコしながらこっちにやってきて……………あれ？気がつけば大策がいらないぞ？お、おいっ！何電柱の影から徹と民子ちゃん、そして大策が親指を突き出してるんだ！？

「さ、辰也行こうぜ！勿論、あたいがおこつてやるからな」

「はは……………どうも」

「おら、行くぜ、お前ら」

「……………おっ……………」

俺の肩を確実に押さえて律さんは上機嫌に空き地を後にしたのだ。
った。

「……………うぶっ……………」

よたよたとした調子で俺は階段をゆつくりと上る。あの後、彼女は制服姿の俺に酒を飲ませ、自分も飲み、何件かはしごと。

「いやゝあの岩山睨みつけた甲斐、あつたなゝ」

これは律さんが言っていたことであり、間違はなく俺を誘い出すための口実だったに違いない。あの後俺の家に行くところなまぐつていた律さんを律さんの補佐をしている人たち？と一緒に説得してここまで帰ってきたというわけである。自分が酒に強い体質でよかったと思うぜ。

「……………辰也」

ふと、そう……………そんな声が聞こえてきた。階段を見上げて、声の主を確認する。双子の姉……………理恵だ。

「……………おえつぶ……………なんか、用か？」

気分が悪いとさすがに何にも考える余裕がないな。俺は壁伝いにあがつていつて彼女を避けるようにして階段を上りきった。

「大丈夫なの？」

彼女も上がってきてそんなことを俺に問う。

「……………さあな」

「辰也！？」

理恵がいきなり大声を出したのでぎょつとしたが、気がつけば俺は床に転がっている。無理をして上ってきたのが祟ったのだろうか？気分が悪くなってきたので下を向いて

「ごはっ……………のみすぎたかな」

「未成年なのに……………」

あゝあ、ちよつとやりすぎて紅い液体まで出てきちゃったが……………理恵には気づかれていないようだった。明日の朝、さっさと処分しちまったほうがいいだろう。

「……じゃあな」

「本当に大丈夫なの？」

「良くあることだ………気にするな」

片手を挙げてさよならを告げて俺は玄関を開けて部屋の中に入ったのだった。

「………アルバム、あるかな」

気分が悪くて今にも倒れそうだったのだがふと、これまで一度も見ようともしなかったアルバムが急にみたくなった。もしかしたらもう少しで母さんたちの命日だからかもしれない。

押入れの中にあるであろうアルバムを俺は探そうとしてやめた。写真の中の俺はきつと笑っているだろう。その自分を見るのが俺にはつらいに違いない。

あの双子もきつと俺と一緒に笑っている。そんな彼女たちを見るのが俺はつらい。

「………寝るか」

ベッドに倒れこみ、さて、どんな夢を見るんだろうか？といったどうでもいいことを考えながら目を閉じる。風呂にも入っていないし、歯磨きだっしてしていない。

疲れていたためか、その日はすぐに寝付くことが出来た。

これが夢であることは俺が一番わかっている。

「なあ、何故あの双子が許せないんだ？」

「忘れたの？ 僕らはあの二人に裏切られたんだよ」

「それは………そうだが、もう何年の月日が過ぎているって思っているんだ？」

「だからだよ。月日が過ぎるほど忘れずに根深く残ってしまうことだっであるんだ」

「………俺はそう思わない。あれがいやな事だっ俺だっ知ってる………だからこそ、俺はあの双子を許すべきだと思う」

「根拠は？」

「あの二人は充分反省している」

「……………どうだか」

「人は変わるもんだ。お前や俺だって変わるべきだ」

俺の夢を終わらせるためか、対話をしていた相手は首をすくめて影に消えた。

第七話・ここから（前書き）

一応、双子編は十話までよていしています。

第七話：ここから

七、

それは幻影、それは残像。

見えない影におびえ

見えている恐怖におびえない

矛盾する状況に彼は……

気がついたら午後だった。

「……………」

遅刻だ。それ以外のなんでもない……………ことだ。無断欠席。

「頭……………いてえ」

昨夜のドンチャン騒ぎが確実に俺を苦しめているのがよくわかる頭痛。二日酔いってのはつらいもんだ。何故、未成年の俺が苦しみを知っているのだろうか？

「おや、やつと起きたかい？」

部屋の中にはあちゃんがニュースを見ながら座っていた。じーちゃんも近くに座ってお茶をすすっている。

「学校には休むって伝えておいたからね」

「……………ごめん、ありがとう……………」

ふらつとなる体を足で支えておきると、じーちゃんが指差したところに着かれていたおかゆをじつと見る。

「遅すぎる朝食が体にいいかは分からないけど食べておくんだぞ」

「うん、分かってる」

じーちゃんとばあちゃんは何も言わずに俺の部屋から出て行った。きつと、何か用があったのだろうが、俺が二日酔いであることに気がついていて今話しても無駄だと悟ったのだろう。じーちゃんばあちゃんが話そうとしたことはなんだろうか？今の俺の脳みそでは考え付くことなど出来ない。

「屋上にでも、行くか」

誰に言うでもなく………しいて言うなら漠然とした不安を持っている自分に言い聞かせたのかもしれない。

屋上にはすばらしいほどのそよ風が吹いていた。そろそろ夕飯の買い物時の今に俺は寝ぼけ眼でここまで来た。なんだか、自分が何を言っているのかわからなくなってきたが、そんな自分の思考を切り替えるためでもある。

「……………」

夕日を見つめることもなく、道行く人を眺めることもなく……俺はただ、空と大地の狭間を見ていた。

母さんと父さんの命日まで……………後、三日。

毎年毎年考えているのだが、父さんは……………本当に母さんを殺したのだろうか？時がたつていくたびに俺の中での父さんと母さんは消えていつている様な気がするのだ。

いつか、殆ど思い出せないという日が来てしまうかもしれないという不安がある。

そんなことはないだろうが。

母さんを殺したことに間違いはないはずだ。

警察官だつて言っていたし、遺書にも自分が殺したと……………震える字で書かれていた。ただ、ただ……………おかしいと思うことは子どもながらにあった。母さんは父さんの家系で家宝と言われていた日本刀で刺されていたのだ。心臓を貫かれていた母さんの顔は……………微笑んでいたと俺の記憶は言っている。人は死ぬとき、微笑むことが出来るのか？

瞬間的に強めの風が吹き、俺の短めの髪は若干風を感じた。

俺はこれからどうするべきなのだろうか？ただ、ただこのままずっと平凡な一日を積み重ねていき、あの頃はああして笑っていたなあと思っただけでいいのだろうか？それだけではいけない気がする。俺がするべきことはそれではない。そんな気がするのだ。俺の

人生を変えたのはやはり、あの事件……もう一度詳しく思い出す必要があるのではないだろうか？双子のことを考えるのではない、あの日の出来事を客観的に考えるべきなのだろう。

だが、俺にとってあのことは既に終わったことなのだ。いまさら思い出しても……

『あの日から僕らはあの双子に辛酸をなめさせられてきたんだろう？』

「違う、あいつら二人は関係ないだろ？ただの……お隣だ」

『そうなのかな？僕はそうは思わない。大体、不幸を呼ぶ少年なんておかしすぎる。今考えてみてくれよ。成長した君にならわかるはず』

「関係ないっていつてるだろ！！！！！！」

がたんっ！！

屋上の扉に何か当たる音がした。俺は静かにそちらへ視線を向ける。

「……………辰也君？」

「里香……か」

そこにいたのはあの日となんら変わっていない……俺を恐がっている目があった。絶えられず、目をそらす。まあ、考えてみればこの屋上に先ほどまでいたのは俺だけだった。心の中で叫んでいたつもりがきつと、口から出てしまったのだ。いきなり騒ぎ出したら誰だって……驚くだろう。

「……………」

「……………」

先ほどまで吹いていたすばらしいそよ風はどこかに去ってしまい、重苦しいだけの沈黙がその場を支配していた。

いたたまれなくなった俺は、部屋に戻るために里香の隣を通って階段に行こうとしたのだが……

「待つて」

俺の目の前に里香が立ちふさがる。その瞳にはもう先ほどの
おびえたような色は見取れなかった。

「何だよ？俺に何か用でもあるのか？」

責めているつもりではないのだ。だが、口調は厳しいものに徐々
になりつつある。ただ……ただそれだけで里香はおびえた瞳を俺に
向ける。

「用って言うか……ちょっと、お話したくて」

控えめでおしとやかな妹……彼女が俺に対して真っ向からお
びえた瞳を向けてくる。

『押し退けても部屋に戻っちゃいなよ。あの日のこと、思い出しち
やうよ？』

あの日の俺はそう言っている。そして、里香はもうしゃべること
もなく、ただ、俺の答えを待っているのだろう。

「……………わかった、何だ？」

結局、俺は昔でさえ明確な意思をあまり見せなかった里香のちょ
つとした一面にもめずらしさを覚えて里香の提案をのんだのだっ
た。

無風、ただ、二人の間に吹く風は重いものだったといっている。

話がしたいといった里香は一生懸命俺に話しかけてきてくれている。
昔はあんまり話していなかったし、こちらが話しかけてもただ頷い
たりするだけだった彼女は様々なことを話しかけてきてくれて入る
のだが……………

「あ、あのね、そのことについて辰也君はどう思う？」

「え、さ、さあ……………」

俺のほうがどう答えたらいいのかさっぱりわからない。だから、
重いものだ。会話のキャッチボールなんてものじゃない。ボーリン
グの玉を投げあっている気分である。

そんな俺にとっては苦しい光景は十分ほど続いた。俺の中の時計

では軽く一時間は越えていたと思ったんだがな。

「え」と、じゃ、また明日……………」

「ああ、また、明日な……………」

変貌してしまった里香に戸惑っていた自分が情けなく思いながらも、悪い気はしなかった。

「また、明日……………屋上に来てくれるかな？」

「え？あ……………さあな」

「ふふ、出来たらでいいから」

軽く笑ったその微笑にぎよつとしながらも、俺は逃げるようにして自室の扉を閉めた。形容しがたい感じが俺の心の中で暴れまわっている。

「……………」

アルバムがみたい。切にそう思った。傷ついたっていい、笑顔を見ることが出来るなら。

押入れの中を引つ掻き回すこと、十分。夕食も食べずにがんばっているとうまくそれは俺の目の前に顔を出してくれた。埃を被って、俺の手に乗ることをずっと、ずっと夢見ていたのかもしれない。それはずっと俺がそらし続けていたあの日の前の思い出、捨ててしまいたかった思い出だ。

適当に開けると、写真の中の俺は確かに笑っていた。そう、心から笑っているといつていい。その左右にいるのはあの双子だろう。面影がきちんと残っている。これは……………小学生になってすぐに皆で撮った写真だ。

「？」

そこで、妙な感じがした。よく考えてみるとおかしい話だ。父さんたちが死んだのはもう、それこそ十年ほど前だ。物心つくかわかないぐらいの時期の隣の男のこのことなどおぼえているはずがないのではないか？

こちらが覚えているからといって、あちらが覚えているという確証はない。

許す、許さないの前に何か重要なことを俺だけが知っていない気がする。あの日の俺と今の俺はあの日の事件でつながっている。では、あの双子と俺は？俺側からは裏切りと失望があの子とつながっている何よりの証拠だ。あちらはどうなのだろうか？一緒にいた時間は本当にちよつとだ。罪悪感なんて感じるものだろうか？

こんなことを考えている間もアルバムをめくる手は止まらない……小1の頃の誕生日に向けてほぼ一週間ごとに撮られた写真は進んでいく。

「……………」

ふと、一枚の写真のところで俺は手を止めた。それに双子は映っていない。親戚とかと一緒に撮った写真だ。

「……………」

皆、笑顔だったのだが……………一人だけは笑っていなかった。

俺は、その顔が誰か勿論知っていた。

第八話：見えぬ関係（前書き）

七月七日、えゝ実は皆さんに聞きたいことがあります。雨月の作品を以前読んだことがある方がいるかどうかわかりませんが……夏に向けて一つ息の長い作品でも書こうかなと考えています。それで、これまで雨月が書いてきた小説の中でお気に入りの作品なんかがあれば教えて欲しいと思います。まだまだ至らぬ部分（誤字など）が多々ありますが、がんばって執筆したいと思いますので出来れば協力してもらいたいなと思います。勿論、この小説も続けていきたいと思っていますのでこれからこの小説をよろしくお願いしたいと思います。

第八話：見えぬ関係

八、

冤罪、それは責めたものが償うべき罪？

贖罪、それは罪をあがなうこと？

罪は何のためにあるのだろうか？

彼の罪とは何なのだろう？

それは俺にとっておじにあたる存在。父さんの……………弟だ。

「何で、無表情なんだろう？」

初めてアルバムを見てみると不思議なことが多いものだ。

それこそ心靈写真がこのアルバムの中に探してみれば一枚か二枚かあるかもしれないが（後で確認したがまったくなかった）全員が笑っている写真のなかで一人だけが笑っていない写真も珍しいものなのかもしれない。そういえばおじさんが笑っているところをみたことはあまりなく、生真面目……………というよりもどこか陰のあるような人だった。

ピンポン

「あ、はい」

誰かが来た様で、アルバムを一度閉じると俺は玄関へと向かった。のぞき穴で確認すると……………

「おじさん……………」

先ほどまで写真の中で無表情だった人がそこには立っていた。笑みを浮かべて。

俺が扉を開けるとおじさんは中に入ってきた。やはり、笑みを浮かべて。

「やあ、辰也君。約一年ぶりだね……………兄さんの命日が過ぎるまで

この近くのホテルにいたことになったんだ。ほら、お土産」

渡されたのは缶ビールとかだった。

「……………」

言葉に詰まっているとおじさんはアルバムを見つけたようで、俺をちらりと見てたずねる。

「みていいかい？」

「ええまあ……………」

どうせ中に入っている写真はガキのころのものだ。いまさらみられて恥ずかしいことなどないだろう。

おじさんがアルバムを見ている間に俺はお茶菓子とお茶を準備してその対面に座ったのだった。

「今、幸せかい？」

「え？」

唐突にそんなことを尋ねてくるおじさん。俺はぼさつとしていたので再び聞き返す。

「どういうことですか？」

「今、辰也君は幸せかい？写真の中の君はとても幸せそうだし今はどうなんだい？」

生半可な答えでは満足しないというそんな強固な意志を感じられる。両親を失った俺を心配してくれているのだろうかと思い、俺は答えた。

「幸せ……………ではないですけど、不幸だとも思ってます。これからまた、幸せなことがあるでしょうし」

「そうだな、君はまだ若いから未来があつたんだつた……………あの日で終わりってわけじゃやっぱりなかったんだな……………さて、それだけ聞ければ充分だ……………私は失礼させてもらおう」

いきなり立ち上がって玄関へと向かっていくおじさんを俺は追いかけるが未だにこの人がどういった人なのかとはかりかねていた。「辰也、いる？」

玄関が勝手に開き、そこから理恵の顔がこちらを見てくる。しか

し、おじさんと目があつたところで……

「あ！」

「ん？おや、君は……そうか、やっぱり未来はあつたんだな」

「おじさん、理恵を知ってるんですか？」

「いいや、知らない」

「……………」

どう考えても嘘っぽい出来事。それはこの空気を変えるだけの力を持っていた気がした。おじさんは靴をはいて何事もなかったかのように俺を見て手をあげた。

「じゃ、また今度会おう、辰也君」

「ええ、わかりました」

「……………」

理恵は気がつけば俺の後ろ側にいて、そつと俺のＴシャツの裾を掴んでいる。

扉が閉まり、理恵は俺から離れて彼女も扉に手をかける。

「え、えくと、じゃあね」

「？」

何のために理恵がここに来たのかさっぱりわからなかったのだが

……………理恵はさつさと出て行ってしまった。

「それにしても……………」

それにしても、あのおじさんと理恵の間には何かあるのだろうか？まあ、お隣だったし、さっきだってアルバムを見ていたのだ。

おじさんが『ん？おや、君は……………』の後には『アルバムに載っていたんじゃないか？』かもしれない。

だが、それにしては理恵の反応がいささかおかしかった気がする。あの目は知っている。里香が俺に向けていた目だ。そう、何かを恐がっている瞳の色……………ただ、それにしてはおじさん自体を見ていた気がしない。自分で言っていてさっぱりわからなくなってきたが理恵はおじさんを見てはいたのだが視てはいなかった。なぜだろう？何故か漠然とした不安みたいなものを感じる。

なんとなくだが……俺は友人二人と話をしたくなった。携帯を取り出してまずは今頃暇であろう大輔のほうへ……

夢を見た。それは双子たちと一緒にキャンプに行った日の夜のことだったと記憶している。だが、そこにいるのは俺と母さんだけだ。「ほら、辰也……水面に満月が反射して綺麗よ」

「うわ〜ほんとうだ〜」

「ふふ、まるで双子みたいよね？」

「双子？理恵ちゃんと里香ちゃんみたいなの？そういえばお空のお月様と水のお月様……一緒だね！」

「けどね、違うのよ。まったく同じなんてないもの……ほら、こうやって石を湖に投げ込むと……」

「あ、ぐにやぐにやになっただけだ！」

「きつと、お母さんが石を投げたから怒ってるのよ。怒りつばい理恵ちゃんみたいだね」

「そうだね……だけどさ、それならお空の里香ちゃんは？」

「視てなさいよ……えいっ！！！」

「歪まないね？」

「ええ、里香ちゃんはしっかりしていて石を投げても怒らないわね」「すごいよね〜僕だったら泣いちゃうよ！この水面の月ってなんていうの？」

「湖面に映っているから湖面月でどうかしら？似て非なる双子ってことを覚えておいてね」

もう母さんの顔を思い出すこともあんまり……ない。十年という俺にとっては長すぎた年月が心の傷を癒してくれた。ただ、古傷はたまに痛むのかもしれない。ただ、夢の中の母さんと俺は双子のことで笑いあっていた。

「……………母さん」

夜中、目を覚まして自分の頬が濡れていることに俺は気がついた。
どうやら、懐かしかったんで涙を流していたらしい。

「？」

ふと、誰かが近くに立っているような気がして俺はそこを見た。
勿論、そこには誰もいない。

もしかしたら、母さんが近くにいてくれたかもしれないなと俺は
思った。

第九話：湖面月（前書き）

さて、そろそろ辰也編も終了が間近となってきました。わんちゃんさんみてますか！それと、これまで読んでくださった方……ありがとうございます。さて、一つ前の前書きで皆さんに言っていたことをおぼえているでしょうか？あの後、悲しいことに一人も……一人もメッセージを……うう、くれる方がいませんでした！ま、まあ、それはさておき、今回で第九話！泣いても笑っても、予定では次で先ほども言ったとおり辰也編は終了です！感想なんかくれると非常にありがたいんですけど……あ、それともう一つ……これは作者様に向けてのことですが、このことはあとがきのほうで詳しく聞きたいと思います。

第九話：湖面月

九、

どんな過去でもそれは変えられない
決定していない未来は変えられる

湖面に映った月を歪めるのを決めるのは……

『じゃ、辰也………今日はお前の言つとおりにしとくぜ?』

「ああ、よろしく頼む………悪いな、面倒かけさせて」

『気にするな、徹にはきちんと言ってるんだろ?』

「ああ、徹のほうにも言っておいた………杞憂で済むといいんだけどな」

『そうだろうな、まあ、俺はお前の頼みだから聞いているから。それに今日はお前の両親の命日だからな。学校にはきちんと言ってるんだろ?』

「勿論」

『そうか、じゃ、気をつけて行って来いよ』

「ああ」

俺は電話を切って学ランに袖を通す。別に学校に行くわけではない。行くべき場所は両親の墓標だ。父が母を殺して自殺した。考えてみれば同じお墓にはいつていることはおかしいことなのではないのだろうか? 母方の父さん母さんであるじーちゃんばあちゃんは娘を殺した男と同じ場所に自分の娘を入れたことになる。

「……………」

俺が別にとにかく言うことではないのかもしれない。息子ではあるのだが、父さん母さんのことについて詳しく知っているわけではないのだ。

「辰也、いくぞ」

「あ、うん」

じーちゃんに玄関のほうで呼ばれ、俺は急いで支度を終えて後を追った。

両親の墓標がある場所は近くの寺……ではなく、結構遠い場所
で隣の県だ。きっと、家に帰りつくのは夜遅く、悪くて二日ほどか
かるに違いない。

交通手段は電車、バス、電車、徒歩といったところか？

電車内、俺はばあちゃんの隣に座って考えていた。

「どうかしたのかい？」

「ん？いや……………」

朝唐突に考えたことを危うく口走ろうとするのを飲み込む。

「何か言いたげみたいだけど……………当ててやろうか？」

にやりとした表情をばあちゃんがしたときは確実に答えを当てて
くるときの予兆であるということを俺は知っていた。

「何故、自分の娘を殺した男と同じ墓に娘をいれるんだろうか……

…そんなところだろう？」

今回も、ばあちゃんは確実に狙ってきた。

「そうだよ……………」

考えてみれば誰だってそう思うのだろうから別に難しいことでは
ないのかもしれない。そこで、それまで黙っていたじーちゃんが話
に加わってきた。

「辰也、物事には何らかの理由が必ずあるものさ……………だからな、
その理由を知りたいと思ったときはそれなりの覚悟がいる。知らな
いことを知るといことは知らないということ犠牲にするってこ
となんだからな」

ちよつと難しいことを言っていることは明らかだった。成績が芳
しくない俺には若干難しい。

黙っていると今度はばあちゃんが口を開く。

「……………知りたいかい？」

「いいや……………やめとく」

それを知ってしまうと何か変わってしまう……いや、壊れてしまふ気がしたから俺は聞くのをやめた。

「そうかい、知りたくなったらいつでも聞きにおいで……まあ、期限があるけどね」

なんともまあ、この話題は期間限定だったのかと思ってそれは何故かと思つてたずねてみると……

「私らが死ぬ前に聞かないとね。死人はしゃべらないからね」

なにか意味深な顔をしたばあちゃんだったのだが……それ以前にはあちゃんじーちゃんはそのこそ、殺しても死にそうにない気がするのは俺だけだろうか？

墓の前にいるのは俺たちだけで、どうやら親族たちは既に終わらせているようだった。まあ、母方の両親であるじーちゃんばーちゃんに合わせる顔がないことぐらい、ここ数年のことで俺は既にそれを知っていた。大抵、俺たちが来たときには既にお墓が綺麗にされており、お供え物がされている。だが、唯一父さんの家系で俺たちと顔を合わせているのは……

「やあ、辰也君」

「おじさん……こんにちは」

おじさんだ。去年ぐらいからだろうか？たまにおじさんを見かけるようになったのは。おじさんはまだ独身で、このお墓参りにもしたがって一人でやってきている。

そこで、世間話に花を咲かせている三人を放っておいて俺はお墓のところをうろろろすることにした。うろろろしないほうが絶対にいいだろうが……

「ん？」

気がついてみれば毎年毎年ここにはやってきているのだがおかしいことにこの霊園のことを俺は殆ど知らなかった。まあ、そんなものかもしれないんだが……

「あれ？」

墓の影に見知った人影を見た気がした。それも、二人……

「理恵、里香……………」

「辰也……………」

「辰也君……………」

二人とも片手に花束を持っていて、もう片方はしっかりとお互い手を握り締めあっている。きっと、お墓参りに来ていたのだろう、偶然。では、だれの？

たずねようとしたら理恵はそれを察知したのか俺から目をそらす。

「行くわよ、里香」

「え、あ、うん」

理恵はそのまま俺を素通りしてしまった。里香も同じようにして通っていき、世間話の花畑となっていてるところへ向かったところまで確認すると俺はその場を後にした。

綺麗な湖面がお墓の近くにあるのは珍しいことなんだろうか？俺はいまだに世間話をしているであろう三人を放っておいて湖を眺めていた。時折、小さな魚が動いている姿を確認できるし、ここには何か来た人を元気にさせる何かがあるのかもしれない。観光旅行の穴場にしたらいいかもしれない。

「辰也」

「辰也君」

「ん？」

気がつけば、右と左に双子が来ていた。

「何ばーつとしてるのよ？」

「いや、ちようどここ……………観光名所にしたらよさそうだなって思ってたさ」

俺がそういうと二人ともはあ？って顔になる。

「辰也君、ここ、霊園だよ？」

おずおずといった調子でそういう里香に俺は当たり前であることを思い出した。

「あ……………そうだったな」

墓地の中を通ってわざわざここに来たいと思う人がどれほどいるのだろうか？

「辰也、帰るぞ！」

じーちゃんの声が聞こえてきた。俺は双子に背を向けることになる。

「……………二人とも、たまには俺の部屋に遊びに来いよ。お茶ぐらいなら出せるからさ」

「「！？」」

きつと、今の二人は物凄く驚いた顔をしているのだろう……………俺は振り返ってみたくなった。

「……………まあ、来たくないんだったらこなくていいけどな」

「そんなこと言って……………お茶が切れても文句言わないでよ？」挑発的な声が後ろから聞こえてくる。

「お菓子、持って行くね？」

素直に嬉しそうな声が後ろから聞こえてくる。

「ああ、待ってるからな」

俺は軽く右腕を上げるとじーちゃんたちのところへ向かったのだ。つた。

第九話：湖面月（後書き）

さて、いかがだったでしょうか？双子と辰也が仲直り……したのはいいのですが、あっさりすぎる！と思う方もいるかもしれません。その理由は次回にて詳しく書きたいと思っています。前書きで最後に言っていたこと……それは、以前雨月が執筆していた『飛龍と書いてワイバーンと呼ぶ！』の続編を書いてくれる方を探しています。書いてもいいよ！という熱意のある方はどうかお願いしたいと思います。その場合はメッセージでお願いしたいと思います。

第十話：終焉（前書き）

さて、今回で終わりになってしまいました。もしかしたら別の話を書くかもしれませんが……まあ、そのときはまた、お願いします。最後に、一言、できれば、最後に評価お願いしたいと思います。

第十話：終焉

十、

これから先の物語

それは嘘かもしれない

幻想かもしれない

だけど、一つだけいえること……

元凶の終焉、そして、少年の消滅

それで、終わる

九月十四日、そこは、とあるビジネスホテルの屋上だった。時刻は深夜十二時を軽く回っており、遠くからは暴走する若者たちを乗せているバイクの音が聞こえてくる。

「……あの、何で俺をここに呼び出したんですか？」

二つの影が闇と交じり合っているそこで、一つの影がそう口走る。「ああ、ちよつと面白くないなあと思ってね……」

対して、冷静に答えるのはもう一つの影。心なしか、人間とは思えないような冷淡な表情、声を見せる。

「面白くない？ どういうことですか？」

その答えに意味を見出せないもう一つの影は首をかしげるような仕草を見せた後に何かしゃべろうとしたが、それより先に相手が答える。

「あの日……」

「あの日？」

そうだよ、あの日だよ……と答えてからさらに口を開く。

「あの日、あの場所、僕はいたんだよ……当事者と言ってもいいね。いいや、犯人。そういつたって過言じゃない……」

「！？」

絶句する一つの影、それに対してその反応を見て嗤っている影。

「……………あの日さ、僕は幸せそうなあの家に来てきたのさ。そのときはまだ、ね、なんとも思ってた。だけどねえ、急に幸せって奴が憎くなった。だからね、普段はあんまりおこらない僕のお兄さんを怒らせたんだよ。そのとき僕らの家に代々伝わってる家宝であるあの刀を兄さんは手入れていたんだよ。勿論、そこで怒らせたら刺されるのは僕さ。僕が刺されちゃかなわなかったから兄さんが愛していた女性についての嘘情報を耳元でそつとささやいていたのさ」

「え！？」

愕然となる一つの影、やはり、それに比例して狂ったように嗤い始める影。

「その顔、その表情！最高だね！……………だけどさ、世の中はうまくいかない。彼女に向かっていった兄さんは笑う彼女の手前で止まっちゃったんだ。まったく、いつの間にかあの男、自分で怒りをコントロールできるようになってたんだね。びっくりしたよ。これも君という存在がいたからかな？」

それを聞いてほっとする影、それに対してもう一つの影は面白くなさそうに鼻を鳴らしたが、歪んだ笑みをしていった。

「……………僕が体当たりしてやったんだ。一発だったよ」

「な！？」

目を見開いた影に対する影、笑うのだろうかと思われたが嗤わずに面白くなさそうに言った。

「その後、僕は誰にも見られないようにその場を後にすることが出来たよ。何、目撃者だっていたかもしれないけど、僕はその日、その場所が一番安全だって知っていたからね……………なんでだって？ふふっ、言ったら面白くないからね」

男は笑うと髪を掻いてさらに言った。

「……………あの男があの後責任を取って自殺するってことは簡単に予測できたよ。だって、僕らは兄弟だからね……………責任感の強い男だった。押して彼女を殺したのは僕だけど、そんな状況、つまり、

簡単に彼女を殺せるような状況にしたのは僕の術中にはまった自分のせいだっと思うだろうと簡単に予測できた。ま、これで忌々しい幸せは潰せたかなって思っただよ。警察は僕を疑ってはいたが証拠を見つけることが出来なかったようだね。計画がうまく行き過ぎて恐くなつたよ……だけどね……」

すつと男の目が細くなり、青年を睨みつける。

「……………君がいた」

「!？」

言葉も出ない青年に男は続ける。

「……………あのあとさあ、君の小学校の生徒を探して僕の言うことを聞いてもらっただ。何、単純な子を選んだつもりだったんだ。まさか、君の隣の家に住んでいる少女だとは知らなかった。それを知った後、信用してもらうには君と一緒に撮った写真を見せれば充分だった。あつさり信じてもらえた僕は彼女にこういった……………さて、なんていったでしょう？」

いやな笑みを浮かべて、目は既に焦点が合っていない……………青年にはそう見えた。

「わからない……………」

「だろっねえ……………ふふ、彼女には『君はいつか絶対にあの子に裏切られる』ってね」

「そんな……………そんなことを小学生が信じるとでも思うのか？言葉の意味だっけ理解できないだろう！」

青年はそう答える。

「ああ、僕もはじめはそう思っただ。だから、ゆっくり、じっくりと教えてあげた。あの子が両親を裏切ったからあの両親はあんな結末を教えたんだ。あの子と一緒にいたら、君の家族もそうなるってね……………」

不幸を呼ぶ少年の事実を知り、絶句していた青年だったが……………顔を上げる。

「……………殺す」

「その目、その表情………やっぱり、あの男の息子だね」

青年は男に掴みかかり………顔面に拳を突き出すがそれを簡単に避けられた上に鳩尾に膝蹴りが入り、緩んだ左手をつかまれて一本背負い………青年は屋上の端から落ちそうになった。元から立ち入り禁止になっていて扉には鍵がかけられていた屋上だから飛び降り防止の柵などなかった。いや、あつたとしてもこの男が柵をどうにかしてどかしていただろう。

「ははっ………無様だねえ！ほら、ほら、どうにかしてみなよ！！！」

蹴られ、そのまま右手だけで体重を支えているような状況となった。青年は上ろうとするが、その右腕の上に男の左足がのせられる。「ぐうううう………」

「ん？どうだい？こんな高いところから落ちたら………どうなるか、わかるよね？」

男を恨めしげに見る青年だったが………その後ろあたりで視線が止まる。

「！？」

「ん？どうしたんだ………ぎゃあ！！！」

男は急に苦しみだし、足を踏み外して青年と同じ状況となった。その間に青年は屋上へと上る。そして、右手で全体重を支えている男を見ようとしたのだが………

青白い、右手が伸びてきた。

「ひっ！？」

青年はしりもちをついてそれから下がる。そして、その右腕は屋上の端を掴んでいる男の手を………つかみ、引きずり下ろしたのだった。

「ああああああ………」

そんな声が聞こえてきて、どしゃっという音が遅れて聞こえてく

る。

「……………」

青年はしりもちをついたまま、壊れたように口をパクパクしていた。そして、その青年の耳にある言葉がきこえてきた。

「……………一緒に来る？」

「……………」

何かが迫ってきていたのが青年にもわかった。

「どっちなの？」

また、一步こちらへと近づいてくるのがわかった。屋上の端……………さきほど、男が落ちたところに青白い右手が載った。

「優柔不断ではあの二人に嫌われるわよ？」

「あ、ああ……………お、俺は……………僕は、まだ、誕生日を祝ってなんか…ない！僕は、あの二人とこれからもずっと、ずっと、誕生日を祝いたいから……………行かない！行きたくない！！！」

上つてこようとしていた右手は動きを止める。

「……………そう、それなら……………」

右手はひっこみ、青年は安堵したが……………急に後ろから声が聞こえてきた。

「……………オヤスミ、辰也……………」

青年は急に意識を失ったのだった。

これが夢であるというのは俺自身がよくわかっていた。

「結局、僕、幼い辰也……………という存在はなんだったんだろうね？あの日から僕は狂っていたのかな？」

「さあな、けどさ、お前がいなくちゃ、今の俺はいなかった。悪いのはあいつでもなかったということだろうよ……………」

「……………そうだね、だけど、僕は母さんについていくよ。あまりにもかわいそうだ。あれが何なのか……………ま、明日の朝起きたら全部

消えちゃうさ。それより、あの人が言ったこと、全部は理解できなかったけどさ、僕は助かった。それだけでいいんじゃないのかな？」

「そっだろうか……………」

「ま、僕は疑問が一つあるよ……………きつとまだ君はわからないんじゃないかな？」

「……………なんだ？」

「最後だから、僕の意見は言えないけどね……………幽霊っているのかな？」

「さあな」

その返事に対して、相手は返事をもう、してくれなかった。

九月十五日、俺は寝ぼけていたので慌てて学校に行くと教室中は近くのビジネスホテルから飛び降り自殺があったという話で持ちきりだった。

「お、珍しいな、君が遅刻なんて……………」

徹がいつものように俺に近寄ってきた。俺はそれに対して右腕のみをあげて返事を返し、話のほうにいくいついた。

「なあ、自殺ってどういうことだ？」

大策が今度は口を開く。

「ああ、それか……………それがちょっと変な話だからきつと話題になっっているんだろう。まあ、普通だったらここまで大騒ぎにならないだろうからな……………ちょうど、その時間帯は下のほうで暴走族の集会みたいなのがあったたそうなんだ。それで、警察がそこに来たら上から男性が落ちてきた……………それはそこにいた全員……………のべ、三十人近く全員がわかってっているんだが、中にはすさまじい形相をした女性と一緒に落ちてきたといった人がいるんだ……………だけれどな、どしゃつという音が聞こえると、男は消えちゃったそうだし」

俺は首を傾げるしかなかった。だってそっだろう？そんなに大人数

が見ている前で消えるなんておかしすぎる。

「どのどいつのほら話だよ？」

そついうと今度は徹が言う。

「ほら話ではないよ、中にはこのビジネスホテルで以前に自殺した女性がこの男性を連れて行ったとか、この男に恨みがあつたからこるしたゝとかそついった適当なことを言っている連中がいるけど、律姉さんが見てたからね」

なるほど、あの人はそついった嘘はつかない。

「むう、それなら一体全体……………」

口を開こうとすると後ろから声が聞こえた。

「おはよう、辰也」

「おはよう、辰也君」

「あ、里香と理恵か……………おはよう」

俺がそついうと徹と大策はおかしそうな顔をした。

「ん？何そんな顔してるの？」

理恵が二人にそついうがその二人は俺のほうを見る。

「終わったんだ、何もかも」

「終わった？ふうん、そうかい」

「終わった？ああ、ご愁傷様ってことか？」

徹はやはり一発で理解し、大策はやはり一発では理解していないようだった。

「あ、それよりさ、辰也……………こんどさ、水族館いかない？」

「水族館？」

「うん、今度の土曜日の午後から……………どうかな？あ、勿論他の三人も誘うから」

その後、俺たちは水族館に行く準備の話をしていたのだった。他愛もない、どこにでもいそうな高校生の会話……………俺にとっては新鮮なものに感じられた気がした。

九月十四日、とあるビジネスホテルの屋上に行くと男性の声と青

年の声が聞こえて来るそうだと。内容はどれもおかしいことで、よく理解できないものにとつては気味悪がつてその場所から去つてしまふ。だが、その内容を知つてゐるある人物がその場所に行くことがあれば、ある事件は解決するだらう……………。

裏切つて、とある青年との信頼を回復するまで少女の道は長かつた。彼女にはずっと、ある女性が見えていた。その女性は宙に浮き、青白かつた。

『あの子をずっと、見ていてね』

九月十四日、そんな夢を見た少女は涙を流しながら心に誓つたのだつた。彼女の妹とともに……………

エピソード、

水族館、ちよつと疲れていたので俺はベンチに座つてばらばらに行動している連中を探すのにいい加減飽きてきていた。

「はあ……………高校生にもなつてみんなばらばらで行動するつてどうよ」

エイがみたい！サメがみたい！イルカがみたい！鯖がみたい！と言つてここについて自己中心的に動いてゐる連中がむかつくのはなぜだらう？

考え込んでゐる俺の視界が急に暗くなる。

「だゝれだつ！……！」

「……………馬鹿かお前、この声は理恵だろ？」

手を振りほゞいて後ろを見るとやはり、理恵だつた。

「ばれたか……………」

「ばればれたつつの……！……………それより、エイはもう見飽きたのか？」

「んゝここに新種の水陸動物を発見したからそつちを見ようかと思つてね」

「……………」

「あのさ、辰也……………」
隣に座って理恵は言った。

「……………幽霊って信じる？」

それに対して、俺は何かを思い出しそうになったのだが……………
思い出せなかったのでこういった。

「ああ、いるんじゃないか？」

「うん！そうだよね！！」

「？」

俺の腕を取って嗤いかけてくる理恵。うつむ、何がなんだかさっぱりわからないが……………放っておくことにしよう。

「それより、そろそろ皆を探しに行くぞ。帰りの電車に間に合わない
くなる」

「うん」

俺の腕を抱きしめ、理恵は立ち上がった。

「お？」

「ほら、行こう？」

その笑顔がいつか見た笑顔だったような気がするのには気のせいかもしれない。だが、俺はその笑顔を見て何故か、ほっとした。

〈END〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2569e/>

湖面月　～裏切りの黒、信頼の白～

2010年10月8日15時32分発行